

NEWSLETTER

THE JAPANESE SOCIETY FOR
PARAPSYCHOLOGY

AUGUST 1979

No. 16

Research on Near Death Experiences

第21回PA Convention (1978)において用
かれたレポートのうちから。

A NEW BOOK, Karlis Osis

NDEs (near death experiences) の研究は急速に増
大している。1958年私がこの研究に始めた頃は、
実に心組いものばかりであった。しかし、この最初の調査で
190例以上の現象を発見した。私は E. Haraldson
と共に2つのモデル、死は死後存続への移行であり、
死は personality の最後の崩壊であり、と作った。もし
2877の事例によりこのモデルをテストした。

本日はここに集った panel members は夫々自分の方
法と資料をお持ちであり、討論により我々の方法がよ
り鋭利となり、更に適切なモデルから導かれたこと
を期待する。(※この日は T. J. Lynn の chairperson)

SOME DETERMINANTS OF THE CORE NEAR DEATH EXPERIENCE, Kenneth Ring

死から蘇った人129人についての調査から、目的の
一つは R. Moody の主張する core NDE (肉体的な
の遊離体験、暗黒トンネルの通過体験、光体験に共通
の要素から成る) の証拠を集めることである。48%
の者が Moody の基本的10項目に一致する体験を報
告した。core NDE は5段階に分けられる。無言の
空らむ、肉体的な遊離感、無限の暗黒への没入、輝
く光を見る、光の中に入り体験である、約19%は
60%、約59%は10%である。NDE は女性では
病気の場、男性では自殺や事故死の場合が多い。

RECOLLECTIONS OF PATIENTS WHILE UNCON- SCIOUS AND NEAR DEATH, M. B. Sabom & S. A. Kruetziger

100人の near death 経験者にインタビューして、
39人の記憶喪失、61人の NDE を持つ。後者
の内22人が非常に美しい別世界へ行ったという記
述を持つ。16人が自分の体から離れた体験をした。
静寂感と安らぎはすべての NDE にみられる。NDE
の有無は、年齢、性別、教育、職業、宗教等とは関係
がなかった。

THE CONTRIBUTION OF NEAR DEATH EXP- ERIENCE TO THE EVIDENCE OF SURVIVAL

AFTER DEATH, B. Greyson & I. Stevenson

最近 NDE の研究が盛んに行われているが、その研究
者心理学者の文献に詳しい人は少ない。過心理学者
は死後の生存を暗示する NDEs と、別の説明が可能
な NDE とを区別することに役立つであろう。

RESEARCH ON NEAR DEATH EXPERIENCES

I. Stevenson

Noyes and Kleith は NDE は死に直面した人が、
その恐怖・苦悶に過剰なため "depersonalization" の
状態にある。他の研究者は、人間の死後の存続の証
拠であると考へている。同じ身体条件で、NDEs の報
告の頻度には大きな差があるから、これは、それな
りな理由があるからである。また、
或種の経験は、特定の身体的状況に起因している。例
えば、山登りでの落下や溺水の時の 'life view' や
paranormal memory。これらの理解のために生理的
変化と心理的特性の両方を同時に研究する必要がある。

学会 ニュース

第135回月例研究会 1979年7月22日(日)

1000~1600、学生会館本館2階(南館)出席者
金沢元基、笠原敏雄、松田幸、大谷宗司、呂芳一、山田
輝明の6名、Handbook 輪読、全訳会による発表
が行われ、続いて笠原氏にF+同氏談 "人間が死ぬと
き" についての説明と討論が行われた。(要旨本誌に
載) 大谷氏にF+、'名古屋過心理学会'の機関誌に
ついで報告、大谷・笠原氏により清田益章君訪問に
ついで報告があった。

NEWSLETTER 1979年8月20日発行 ©
編集・発行：日本超心理学会

文献紹介. "人間が死ぬとき" 並原 敏雄 訳 東京. 大
ま書房. 1979. K. Osio and E. Haraldson:
At the Hour of Death, New York, Avon Books
1977.

医科大学や看護学校では、死と人間存在の密接であ
ると教えるけれど、これは間違いない事実か否かの
か。死と生前に生じた人間は、このような見方は
対立する体験を予知することもある。本書では、こうした
問題と医師と看護婦から集めた臨終の観察例を基に、
科学的な手法を用いて検討する。

バレットの小著「臨終の幻」にヒントを得た著
者オシオは、1959年から60年にかけて、
オレゴン州の調査とアフリカで行ったが、その結果は
Parapsychology Foundation から「医師と看護婦に
よる臨終の観察」という名で1962年に出版され
た。次に1961年から64年にかけて、アフリカ
東部五州に住む医師、看護婦と対話し、オシオ調査が
行われたが、同じアフリカで行った共通の聖書
物語が背景にあるという可能性があった。オシオの
医療関係者に対象に1971年から調査を行った。

予備(オシオ)調査は、医師、看護婦を5000
人を対象に調査票に基づいた調査を行ったが、回収
率は6.4%、返答報告は35,540例であった。内
訳は、霊姿を見た者1,318名、幻を見た者、884
名、気分の高揚がみられた者753名である。(オシオ)
オシオに興味を催した190例については、更に詳しい
インタビュー等を行ったが、患者の医学的状況、心
理学的背景等考慮して分析したところ、幻覚的行動
の半数以上は病的な起源を有すること加判明した。病
的起源を持たないように思われるものもあつた。そ
うのような幻は、患者の意識、見識が良好に保たれ
ている時に見え、幻の置かれた状況と完全に知
覚しながら、その背景の中でみえたものであつた。
こうした幻は、早くとも死した親族のときで、患
者と迎えるに走らなければならない。この点、精神病患者の幻
覚とは著しい相違点がある。また、患者を迎えに
来たときにも霊姿が現れた場合、霊姿をみながら10分
以内に死した者が多かった。さらに、患者のほぼ半
数は、霊姿をみることが気持ちよかった。

予備調査の結果を基に、来世仮説と死滅仮説

という対立仮説群をたて、これを軸に検討を行な
う。

来世仮説

死滅仮説

臨終の幻はESPに起因する。	病的起源に起因する。
患者の要因は無縁	患者の予知に左右される
臨終の幻は知覚的である。	幻覚的である。
ESPが生じた状況では	意識の清明度が低い方が臨
臨終の幻は見えやすい	終の幻は見えやすい。
幻覚は生じた	予知は生じた。
予知は生じた	予知は生じた。

予備調査に引き続き行なわれたアフリカ、インド、西
の調査では、調査票の回収率は高く、返答率は1908
通に上つた。返答率(80%)に上つた更に詳しい
インタビューを行ったが、オシオの予知と一致する症
例591、場面幻例112、気分の高揚例174をコ
ンピュータにより分析を行った。

調査例は、(イ)「今この時」に無肉原で誤死したものの
(ロ)筋は通っている(オシオ)俗事か主題となること
(ハ)筋が通っていない(オシオ)「今この時」に肉原に
いるものの、その予知は生じた。(ロ)は、更に、覚醒
と記憶の両方に加えて分けられたが、いずれにせよ
(イ)は対照的であるという点に意味がある。

次に調査体験の特性をみる。

- ・半数以上は5分以内で終わってしまった。
- ・過半数の患者は、体験後24時間以内に死した。
そのうち9割は幻覚を見た患者群では死したの
間がなかった。
- ・健康者の見るとは対照的に、死者も宗教上の人物
の霊姿をみられた者が多かった。
- ・半数以上の霊姿は、患者に迎へられた。
- ・患者の4分の3は霊姿に同行した。しかし、こ
の点、国民性にかかわりあつた。
- ・患者の心理学的、文化的背景をみる。
- ・患者の幻覚体験の大半は、薄物、新器、蒸熱、服疾
患によるものであつた。
- ・臨終の幻は、全般にみられ、性別や年齢には無縁
のようである。
- ・この宗教を信仰しているかは、臨終の幻には無縁の
ようであるが、信仰度は必ずしも関係が深いとい
えない。

・教育程度の高い患者ほど「見た」という結果が多い。
これは、単に「疑念分析」であるため、今後は、
さらさらな適用向の交互作用分析を行って、解決がま
くつかるかという問題の解決を試みた。【結果】
この点、

- ・医学的要因は、あの世から迎へに来る霊魂と作
験する系にはなり得ない。
- ・霊魂体験は、年齢とストレスや社会的適断の結果に
はならない。また、患者の欲求、予後に対する予期
前日の気分と関係している。
- ・迎へにきた霊魂に対する拒絶反応には、国民差が
みられるが、それはなぜか。これについては国民性の
違い、他は宗教の違いに原因している。
- ・西国とて、七生両親の霊魂加群は拒絶が多かった。
- ・来世に肉連した霊魂（死者あふく宗教上の人物の
霊魂）は、宗教や死後世界と肉連しているのと七生
の感情で迎へたのとでは、生者の幻影の場合よ
り受けがよくなる。
- ・両国ともに、遠方に報告する傾向が見られたが、遠
大報告は減少した。

来世体験にまつて、末期状態での高揚状態の
は、通り来り死後世界へ、患者がEPP的に意識
していることにより、自分の高揚は、臨終の幻影場
合と同じく、死の直前である。医学的要素は、自分
の高揚と相対する傾向にあるが、患者の来世信仰と
宗教信仰は、必ずしも宗教的感情に必ずしも傾向にあ
た。性別、年齢、教育程度は、ほとんど判別力と見
なされた。

一度は死に近い状態に陥りながら蘇って、霊魂体験
を述べた患者は120名あった。この体験は、死に
いたる患者の体験内容と多少異なっていた。医学的
心理学的要因の説明の、可能性を検討してみよう。
この点、少数ながら「見た」例はみられた。大半は、
【この点】の要因は説明がつかない。おかしな
群には、本人の死後観念と心とが一致してある。こ
れは、自分と迎へに来る霊魂と見た分の1か、何
れかによるかは不明である。特に「見た」は、
あの世に連れ去られるもの「あの世のあなただけ」の
と分りし趣と似た例もいくつかあった。

西国の幻体験は112例であった。これは、

医学的要素の交互作用が検討された。場面のは
こうした条件とは無関係であると考えられる。予後、予
期、拒絶の傾向は、ストレスの程度による場合
でも、あの世からの体験程度は全く分らない。
予備調査も含めた3回の調査向と、研究の経緯が
ある。これは、現象向に根本的な一貫性がある
こと、来世以外の説明は、これは現象向
説明であること、死後世界の存在を考へ
ては、理に道はない。（要約：佐藤敏雄）